

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

貧民窟てなんだんねん 貧民窟共同体住人 30
ターミナルに〈民衆ひろば〉を 神村隆志 25

境川私記 堀田博之 21

模索舎十年 五味正彦 18

韓国青年学生の発表した「歌謡ベスト10」 16

水牛楽団のページ 15

流れ去った悲哀―過ぎし時代の歌謡(一) 高銀 2

流れ去った悲哀(二)

高^コ銀^{ウン}

——過ぎし時代の歌謡

キムギョクシク
金慶植 訳

鳥よ 鳥よ 青鳥よ

冬の蘆嶺山脈は超然としている。その下に湖南地方独特の、散りばめたような山や野がくりひろがり、それがつきると一望無限の平野の上に深い静寂が訪れる。久しぶりの目の保養である。ある風景は、その風景自体が人を泣かせる。井邑、古阜そして梨坪平野を眺めながら、ひとしきり泣きたくなるのもそのためである。

おそらく、このような涙が時代をつくつていき、朝鮮後期の四・四調の無名の歌謡が生まれたのかもしれない。

あの百奇は井邑詞の本場である。そしてその井邑詞の清々たる月夜を眺め明かすひとりの農婦の限りない愛が、蘆嶺山脈の良質の水とともに、多くの時代の痛みや喜怒哀楽を織りなした。「月は高く

昇りてよ 遠くまで 照らしておくれ オギヤ オガンドリ アウ グロンドリ……」の月夜は、しかしいまの私の旅愁のなかでは得られない。

ただ、このような愛を、名もなく持ちつづけたこの地の人たちの歴史はどこへ消えたのだろうか。

現実には歴史を拒絶することによって作られるものである。歴史だけではない。過ぎし夏の緑色の山野、豊艶な自然の官能すら、いまは探すすべもない。冬の湖南平野の虚無を味わったことのある人だけが、この地の人間であるといえるようになっていく。

韓末の一八九四年二月の冬、ひとりの農村知識人全捧準は「除暴救民 保国安民」の使命をおびて、この地の農民が踏みこじられている悲劇を克服しようと、憤然と立ち上った。彼は近代韓国の最大の民間集団である東学の古阜接主(科儒の団体を仕切る人)として、一時期は大院君の門下にも出入りしながら、同時代に対する深い状

況意識を育てた短軀五尺の農民指導者であった。

このような彼に、井邑、梨坪平野は、近代史の開幕ともいふべき民衆の抵抗運動を集約させたのである。彼はこの地の山野で生れ、この地の百姓の側に立って、この地の真理を愛した。その愛が素漠とした白山、斗升山、黄土岬、道橋山のふもとで東学農民の革命を起したのである。

彼が住んでいた梨坪平野は、井邑、古阜、泰仁の三郡の水路が集まる万石湫の東津江支流によって、この地に生れた人は、先天的に農業にたずさわるように運命づけられていた。

しかし、土地に対する信仰が深まるにつれて、彼ら自身の農業に対する忠誠は、彼ら自身のためのものではないということ、骨の髄にしみ込むほどに経験する。彼らの農業は趙弼永、趙秉甲、李容泰ら地方汚吏による収奪、弾圧の対象であった。なんでもない万石湫の提防を築役させては上畜一斗落(二百坪)に二斗、下畜一斗落に一斗の血の水税を強徴して私利私欲を満たす古阜郡守の趙秉甲に、彼ら四十余名は抗議、再び六十余名がその水税に対して請願した。しかし彼らに免税するどころか逮捕し、処刑してしまつた。

それで甲午の古阜民乱は、いったん東学とは関係なく洪景来の乱、晋州民乱以後の抵抗の脈絡を受けつぎながら、寒い冬の暁を期し万石湫の南、馬項戦場に集まつたのである。その日、全捧準は韓末の農村抵抗運動家であった全彰赫の葬儀を終えるやいなや、父の民乱精神を受けついで梨坪の長内里鳥菓村を立つた。

歴史家がもっとも熱をこめて叙述する韓国近代史の重要な東学革命は、このようにして始まつたのである。この東学の農民が、白い

水綿の布を頭にまき、ここの特産物である竹槍や竹でつくつた農具を持つて決起したとき、もつとも偉大で単純な哀しい調べ「鳥よ 鳥よ 青鳥よ」が人々の口から口へとうたわれはじめた。いや、それより前にこの地の女たちが、貧しさと哀しみにおのずと口ずさんだ調べであった。

鳥よ 鳥よ 青鳥よ

緑豆の島に 下り立つな

緑豆の花が ホロホロ散れば

靑舗^{チンポ}売り婆さん 泣いて行く

金素雲 訳

새야 새야 파랑새야

녹두밭에 앉지마라

녹두꽃이 떨어지면

청포장수 울고 간다

この歌は蘆嶺山脈以北の広い湖南地方の娘たちの口から、老婆の口から、何か不吉の予感のように、秋の取入れが終わつたあとの、あの寂漠とした平野から、静かに広がっていった。

時たま言葉には嘘があり、また嘘で固めることもあるが、歌はいつも真実だけを歌いあげる。この歌は後に、東学革命が韓半島に侵入していた日本軍によって悲壯な敗北に終り、全捧準が法務衙門大臣徐光範の死刑判決により四一才を最後に鼻首にされ、全国にその

屍体を晒され展示されたあとの「璣準よ 璣準よ 全璣準よ 鉄の
轍かついで 敗北してしまつた」天が泣いてジト島は雨に濡れたよ
その雨は雨でなく 億万兵士の涙だとよ」のような直接的な悲嘆
の歌とともに、東学抵抗の主題歌として発展していった。

この地でもっとも重要な自主者の革命は、こうして東学乱戦役に
悲惨な戦後の絶望と農業的廢墟をもたらした。しかしその敗北は偉
大である。そしてこの地の農業にたずさわっている人たちが、いか
に偉大であつたかを見せつけてくれた敗北者としての意地と、自尊心の
記念碑でもあつた。

井邑郡梨坪面長内里には、一八五一年頃に建てられた全璣準の陋
屋が、井邑郡所有の不動産として保存されている。ちょうどその隣
りにいる金桂順老婆（83歳）は、十七歳のとき「鳥よ 鳥よ……」
をうたっていたといっている。また、この村の金善札女史（50歳）
も、その母（83歳）からの子守歌「鳥よ 鳥よ……」をおぼえてい
て、七人の子どもを育てるあいだ「鳥よ 鳥よ……」を子守歌とし
てきかせたという。

いふなれば、この歌は湖南地方の生きざまをそのまま写し出す主
題歌でもあつた。それが東学革命歌として発展していつて、敗戦以
後は農兵の未亡人たちが、戦死した夫の霊を慰める悲しい挽歌とな
つた。実際に東学革命の戦死者と処刑者数は、人口比率から見ると
実に衝撃的な三万余名に達している。そのなかでも、処刑されなかつ
た未亡人たちは、この歌をうたうことによつて夫の冥福を祈り、
夫の霊を慰めたのであつた。

この未亡人たちは、夫の屍体、もしくは遺骨を探し求めることが

できなかった。彼女たちは悲しみよりも、より大きい貧困とともに、
怨みをこめて死んでいった夫の魂を、子どもたちに受けつがせるた
めの作業を、この歌に托し眠らせることによつて完遂させた。その
子どもが育ち、死んだ夫に似た顔だちになつたとき、彼女たちはそ
の顔を愛したのである。

そして、父のない子を育てながら、その子どもたちに父の魂を受
けつがせるための子守歌、そしてまた一望無限の平野での貞節のた
めの自慰の歌にしたのである。

この地が悪いよそ者に奪われる近代史の大きな受難のなかで、再
びこの歌は、この地の悲劇を象徴する哀歌として、あの井邑詞の愛
のように、この地のあらゆるところで元氣よくそして哀しく育ちゆ
く若い乙女たちの魅惑を表現するものとして広がっていった。

史学者金澤基博士は「われら全羅道に生れた者たちで、この歌を
うたいきかない者はいない。私も子どもころはよくうたつたもの
である」と、証言している。

いま、井邑では甲午東学文化祭が毎年開かれていく。いふなれば
八十年前のひとつの農民革命は、いまこの地の、歴史の意義を強烈
に受け持つ近代の精神史に屈したことになる。また井邑の緑豆学生
連合会、緑豆子ども会は、この歌の合唱団をつくり、この歌の深
い意味を実感している。

金桂順老婆に歌をおねがひした。しかし首をふつた。いまは歌を
うたつていて、その歌をきいてあの世へ行く準備をしているよう
であつた。まさに、いま歌をきくことと死ぬことは同じだ。

冬の梨坪平野は軟灰色に色どられる。その平野に散らばっている

学徒歌

作詞者未詳の「学徒歌」

学徒よ 学徒よ 青年学徒よ
城壁の鐘の音 きいてみよ
鳴つては 消えて もどらず
人生百年過ぐるごと 走馬のよう

학도야 학도야 청년 학도야
벽상의 패종을 들어보시오
한 소래 두 소래 가고 못오니
인생 백년 가기 주마 갈도다

学部唱歌の「学徒歌」

青山に埋もれた玉刀

磨けば 輝く
落々長松 大きな松も
切ると棟梁になる

勉学にはげむ 青年たちよ

自分の本分 忘れずに

暁の月は落ち

東天の旭 輝き出す

청산 속에 문헌 옥토
갈아야만 광채 나네
낙장송 큰 나무도
짜야야만 동량 되네

공부하는 청년들아
너의 직분 잊지 말아
새벽달은 넘어가고
동천 조일 비쳐온다

金仁澤作曲「学徒歌」

学徒よ 学徒よ あの青山眺めみよ
古木は枯れ 若木は育つ

東半球大韓の わが青年学徒よ
遊びにふけらず 学校へ行こう

학도야 학도야 저기 청산 바라보게
고목은 썩어지고 영목은 소생하네
동반구 대한의 우리 청년 학도들아
놀기를 조화 말고 학교로 나가보세

漢江と臨津江はこの冬は向こう側で合い、江華島甲申の対岸月申は雪におおわれた広い金浦平野に、敵意をこめているかのような山のみもとで、干してある高麗人参と畑はこの冬の寒さにふるえ、耐寒性のある桃の木をなぞりながら、一種の北国情緒をくりひろげている。

この地の男なら、シベリアと北満の広漠たる風景を知らねばならない。この地の老いた男なら冬の亡命者になった経験をもたねばならない。京畿の西部の冬の平野の雄大な雪景色はそれを物語っているようである。

金浦郡月申面郡下里は高麗末以後、通津監務、通津県監、通津都護府のあった古都の雰囲気、その前に疾走する京江道路があるにもかかわらず固守している。

この地域はいくつかの山と良い米の産地の平野で、古代史諸族の決戦場であり、それ以前には古朝鮮と初期秦國との国境線となっていた。三国時代には百済流民の一種族でジブシー集団である楊水尺族が、どの社会の官籍にも属さずに漢江流域の浮浪野営生活をして

いたところである。いふなれば官・賤みな重要な要塞だったのである。

通津郷校大成殿明倫堂は裏山にある。役所は植民地時代には駐在所だった。通津衙門跡は、いまは月申面事務所になっている。そこには樹令四百年以上の榉の木が腐った部分をセメントで固められたまま立っていて、光緒、乾隆の年号が刻まれている県監、行府使、觀察使の不忘碑が並んでいる。

ここに光武十年に建てられた李東輝系の私立学校がある。それがいまの月申国民学校で、五つの分校を持つまでに発展していった。いまは通津学校のあとに汾津中学校ができています。

まさに、ここで日本の統監府軍国機務処の露骨な内政干渉、日清戦争が終わったあとの隆熙元年、旧韓国の軍隊解散によって武装解除された陸軍参領李東輝が、その軍人に対する郷愁を満たすために、学生たちに軍隊教育をした。

木銃をかついで木綿の制服に制帽をかぶった通津学校の学生たちは、ちようど軍歌のように「学徒よ 学徒よ/城壁の鐘の音 聞いてみよ/鳴っては 消えて もどらず/人生百年過ぐる事 走馬のよう……」の「学徒歌」を声高くはりあげたとき、それは他の学校の学生たちの羨望的でもあった。独立運動家李東輝は、国が亡んだのは軍の力がなかったからだと自認していた。だから国をとりもどすためには、若い人たちが軍人に育てあげねばならないと固く信じていた。そこで明治唱歌の楽譜に歌詞だけを変えた「学徒歌」を、若者たちに合唱させては金浦の平野をゆるがしたのである。

言論人柳光烈翁は「交河郡(坡州郡)から河を渡って通津にいき、

通津学徒の合唱をきいた。そのとき見物にきていた女たちが、どうしてあんな立派な子ができたのでしょうか、と感心している声をきいた。秩序よくまさに軍隊の行進、列兵式をほうふつさせるものがあった」と述懐している。

現在月申面の李根吳氏(41歳)も、この伝統のおかげで「学徒歌」をおぼえて、通津普通学校(小学校)三回卒業生である金恩沢氏(60歳)も、やはりその時代の光景を耳にタコができるほどきいて「通津こそ学徒歌の合唱団」だと強調している。

一九〇〇年から一九一〇年のあいだの傾国期間は、すでに亡国を実感したあまり、この国の将来を次の時代にまかせようとした韓末の既成時代の衷情によって建てられた私立学校は、無慮二千三百校にのぼった。それらの学校は、宣教系の讚美歌を除くと、この「学徒歌」を教科書にしたし、また遊びにも歌われたりした。「学徒歌」の特徴は、既成時代が新時代を警覚せしめるものであった。咸錫憲翁も「九歳のころうたっていたことを鮮明に記憶している」と語っている。

いずれにせよ、この歌は韓末の日帝時代の国民皆唱の歌であったようである。通津学校の軍歌の代用ばかりでなく、全国各地での「学徒歌」は、あらゆる音がみな音楽に関係するものではないという、音楽の真理をもっとも単純に規定した四・四調の定量音符から体験していくと同時に、それは一種の国民歌謡として、その時代の主体を受け持った歌の独立運動でもあった。歌は人間が長い時代を生きぬいた「生」の声である。「学徒歌」は韓末以後の、この国の「生」であり「生」が集まってつくりだした真実の全天候的楽典であった。

だから、日帝の手先の御用学部の「学徒歌」を受け入れず、作者未詳の雄々しい学徒歌である「学徒よ 学徒よ……」をうたったのである。学部の「学徒歌」六節のうち二節は次のようなものである。「青山に埋もれた玉刀/磨けば 輝く/落々長松 大きな松も/切ると棟梁になる/勉学にはげむ青年たちよ/自分の本分 忘れずに/暁の月は落ち/東天の旭 輝き出す」前時代的な代物である。その反面二十歳の音楽開拓者金仁湜は、一九〇五年の平壤西門小学校連合運動会で、彼の作詞作曲による「学徒歌」を合唱で開かせたりもした。

彼は十一歳のとき平壤の崇徳学校に入學し、宣教師夫人ハント女史とスヌーグ嬢に声楽を学び、各種の楽器の手ほどきをうけた。彼はバイオリンを手がけてから三日目にもう崇徳学校で演奏するという才能を持ちあわせていた。

正楽、俗楽、雑歌をはじめとして、この地に合唱が試みられたのには深い意味がある。英正パンソリや歌辞も合唱が目的でなかった。

この国がもっとも危機に瀕したとき、この国の人たちは合唱という集団の原形意志をなしたのである。特にこういう合唱は関西地方の草新地方では当然のことである。「平壤の人間は自分たちだけでやっている」という言葉は、その地方の伝統的な抵抗性をあらわす。彼らは近世史を通じて、いつも不遇な辺方政策の対象であった。そしてまた漢陽の中央集権に対して、いつもその黒い不正をあばき出していた。その中央が日帝にとってかわられると、彼らの独立思想は反日帝へとつき進んでいった。その表現が金仁湜の井を使った画期的な「学徒歌」に集約されたといえよう。

李有善教授は、だから「楽譜の問題とか音楽的な面からすれば幼稚ですよ、しかしこれは韓国最初の作曲だという重要性を持っています」といつている。特に歌はドで終わらなければならぬのにレで終わるのは、楽譜の誤記ではないかとさえ思われるほどおかしいのがこの歌の欠点のようである。

朴容九氏は「金仁湜を近代音楽史の原点として、金亨俊、金永煥、李尚俊の本格的音楽が展開する」といいながら、彼が幼いころソウルにいた金仁湜を訪ねたときの印象を、優しくて背の高い紳士的な長老であったと語っている。

学徒よ 学徒よ あの青山眺めみよ

古木は枯れ 若木は育つ

東半球大韓の わが青年学徒よ

遊びにふけらず 学校へ行こう

학도야 학도야 화기 처산 바라보게

고목은 썩어지고 영목은 소생하네

동반구 대한의 우리청년 학도들아

놀기를 조화말고 학교로 나가보세

これは、自然発生的な歌謡「学徒よ 学徒よ 青年学徒よ」や、官製の「青山に埋もれた……」よりもより女性的余韻を残してくれ。しかしこのような一連の「学徒歌」は「学徒よ」という呼格で反覆しながら、その時代の現実を浮き彫りにし、その呼格の誇張で

強い説得力をもち、うたうものの胸に行動に陰影を起し、きくもの純粹のなかにその時代に打ち勝つ勇氣の氣運を起こさしめている。いいかえれば、このような開化期を通じて、いまままで信じていた個人史的な意識とか、依存倫理を止揚し、その時代の革新、外勢、独立とのあいだの葛藤のために、苦悩せざるをえない青少年の傷に、彼らの集団防衛的な形而上学と民族一体理念の体得のために、この歌はいかに大きな役割を果たしたかである。

彼らはこの歌で悟りこの歌で集まった。李朝の党争史は韓末の制度、外戚政治によって、あらゆる個体が分裂するという現象が起きた。そのとき民乱、義兵、農兵があらわれ、そのあとの敗北がひとつの歌として彼らの傷痕をいやしながら、この国の踏みじられた愁いのなかから、彼らの希望の一部分を表現したのである。

そしてこの歌を合唱できる大団員の情熱が、その次の時代の己未万歳へとつながる。ひとつの民族が使わなくてはならない音楽の素材が、その時代に生きてきた民族に、民族芸術の形式をつくとすれば、彼らがうたった「学徒歌」は、われら自身の思想をつくったといえよう。歌は思想である。歌は自然だとか社会の運動の基礎になる深い法則である。

ああ、この地の人たちよ、あなたたちの息子や娘たちを偉大な単数につくらず、偉大な合唱のなかの単数につくれ、それがこの地に住む、まず最初の義務である。

愛国歌

一、聖者新聖 五百年は わが皇室

山水高麗 東半島は われらの国

(くりかえし)

無窮花三千里 華麗なる江山

朝鮮は 朝鮮に 道安らかに

二、二千万はひとすじに 国を愛し

士農工商上下なく 本分を尽くそう

一、성자신성 오백년은 우리 황실이요

산수고려 동반도는 우리 본국일세

무궁화 삼천리 화려강산

조선사람 조선으로 길이 보존하세

二、이천만 오직 한마음 나라사랑하야

사농공상 상하업시 제직분 다하세

〈尹致栗作詞〉

복되신 오늘날 은혜를 내리사
만수무강케 하야 주쇼서

〈セムナン教会高宗誕辰慶祝礼拝での歌〉

上帝よ わが国を守り給え

半万年の歴史 ベタル民族
永遠に栄え 無窮なるよう
聖地東方の 流れすみずみまで
上帝よ わが国を護り給え

상대여 우리나라를 도우소서
반만년의 력사 배달민족
영원히 변영하야 히달이 무등하도록
성디 동방의 원류가 곤곤히
상대여 우리나라를 도우소서

〈エッケルト作曲〉

東海の水 白頭山 湧きつきるまで
神の護りし わが国万歳
無窮花三千里 華麗なる江山
大韓の人 大韓に 道安らかに

동해물과 백두산이 마르고 닳도록
하느님이 보우하사 우리나라 만세
무궁화 삼천리 화려강산
대한사람 대한으로 길이 보전하세

〈安益泰作曲〉

・英国列強は、大院君の極端な国粹政策以後角逐がはじまった。高
崇の政府は、その角逐に従って、今日は親露、明日は親日とゆるぎ
ながら、それが日清戦争の勝利者である日本の統監部戦略によって、
ひとつの高価な順応者になってしまった。

そのときの人たちは金弘集、兪吉濤たちの苦悩を克服する自国意
識を自発させ、この国をはじめて、この国の在野者たちをして愛す
るようさせたのである。彼らは傾国時代には愛国者となり、失国時
代には熱烈な愛国者となった。

そして京郷各地では、愛国歌作詞・作曲が無形の国民運動を起し
た。また、このような運動によって、開化期の学校の校歌も、やは
り愛国歌の意味を主題とするようになった。このような「愛国歌」
の雰囲気によってかもし出された愛国歌はおよそ十五種にものぼる。
一八九六年九月九日高宗誕生祝賀歌として、英国国歌の曲にのせ
た愛国歌「天にまします神よ 心深き宗主よ／慈しみを 垂れ給
いて／この国 この地をお守りくださるよう／おお主よ この国を
お護り下さるよう／われらの大君主陛下万歳／万万歳 万歳／幸あ
る今日の日に 恵みをたれ給え／万寿幾久しきを」が、ソウルの七
・ムンアン教会での慶祝礼拝でうたわれた。

この愛国歌は、近代唱歌が宣教師たちの普及した讚美歌から、音
楽形式を受けたことを象徴している。そしてそれが発展していきな
がら、日本の明治時代の頽廃主義の歌謡の影響をそのまま受け入れ
る現象にいたるまで、この国の開化期を受け持っていた。

また、一八九六年十一月二十一日、迎恩門を壊したあとに独立門
を建てる定礎式に、尹致昊作詞「聖者新聖 五百年は わが皇室／

愛は、その愛を失うときまでを含む。いや、愛はその愛を失った
とき、はじめて完成されるものだ。すべて愛の歌が、なぜ愛の賛歌
より、その愛を失った苦痛と悲哀をより強調しているかをみてもう
なづける。

韓末の高宗即位を、いったん近代史の起点とするならば、その近
代史はこの国の保守的な伝習社会が、開化を体験しはじめることと、
この国の最後の王朝が崩壊することから幕が開かれたといえる。

そして、この国の人たちは、開港の文物を受け入れることによっ
て、すぐさま、この国が奪われるという亡国の悲劇につき当るので
ある。近世の被治者たちは、誰が執権し誰が流刑にされたかという
ような官吏上部構層とはまったく関連なく、ただ宿命的に支配者の
いうなりになっていた。一種の「国被れて山河あり」の思想が、彼
ら農耕民たちの基本観念であった。

しかし、この国が亡国の危機と、国を失う悲劇を経験したとき、
はじめてこの地の人たちは自分の国を認識しはじめたのである。国
を愛するということは、その国が失われようとしたとき、そして国
が完全に奪われてしまったとき、すべて名もない民間で、国を愛
する歌が京郷各地でうたわれた。

国が失くなったとき、そこに国を愛する歌が、その国を再び探し
求めさせたのである。だから、この国の韓末は、誰もが愛国歌の作
詞者になることができた。

一九世紀の韓半島は、伝統的な事大主義体制の従主国である中国、
古代から壬申の乱をはじめとする侵略者の日本、そして帝政ロシア

山水高麗 東半島は われらの国／無窮花三千里 華麗なる江山／
朝鮮は 朝鮮に 道安らかに／二千万はひとすじに 国を愛し／土
農工商上下なく 自分を尽くそう／無窮花三千里 華麗なる江山：
…」の愛国歌が、培材学校の音楽教師D・サバンヤーによってオー
レンシヤインの曲につけて培材の学生たちに斉唱させられた。

この前後に徐載弼の「独立新聞」の愛国歌が、そして巡検や無名
の人たちにもいたるまで、その数は数えきれないほど多数にのぼって
いる。

特に「独立新聞」第三号の「ソウルのチェソンドンの文」として
発表された愛国歌は、李承晩の「枯木歌」とともに、崔南善の新体
詩を先がける開化詩歌だといえよう。そのあと、このような愛国歌
の発表は、一八九六年までの「独立新聞」だけでも二十余種になっ
ている。この国が亡びゆく時代に生きた人たちは、国や民族を意識
することによって、自分自身を歴史状況のなかにおくことができた
ということが、このような愛国歌の形をとってほとぼしりだったので
ある。

そして、この国の人たちの農業的な自然環境が、まさにこの国の
主体の現場であるという事実を、これらの歌によって知らしめられ
たともいえる。

史学者劉鳳栄翁は、彼の郷里平北の鉄山の新明学校で、十二歳の
ときはじめて、このような愛国歌を聞き教わって歌ったといってい
る。「旧韓末の愛国歌も、その曲調はいまのそれと似ていましたよ。
曲もそうだが歌詞もやはり」と。

韓末の民間の主体意識を発効させたこの愛国歌の熱情は、韓日合

鳥よ 鳥よ 青鳥よ

새 야 새 야

새 야 새 야 파 랑 새 야 녹 두 발 에 앉 지 마 라

安益泰作曲 「愛国歌」

동 해 물 과 백 두 산 이 빠 르고 황 도 록
 와 느 님 이 보 우 하 사 우 리 나 라 만 세
 무 - 궁 화 삼 - 전 리 화 려 강 - 산
 대 한 사 람 대 한 으 로 길 이 보 전 하 세

併直後にはより拡大されていき、三・一運動を終りとする一九一〇年代には日本総督の武断政治によって弾圧されるようになる。そしてそれらは亡命者、地下運動家、留学生、移民者たちが郷愁として国外で歌うしかなかったのである。

このような愛国歌を英訳した人で、忘れられない人に、ドイツ人フランツ・エッケルトという人がいる。彼は現在「一八五二・四一・一九一六・八」という生涯が刻まれている一メートル三〇の玄武岩墓碑の前に埋められている。

ソウルの外人墓地は、厚い残雪におおわれ、墓地特有の静寂が、第二漢江橋の騒音を消しながら佇んでいる。この墓地は高宗がこの国の外人たちのために下賜された土地である。墓地管理所長李康泌氏(39歳)は、「この人は韓末の国歌の作曲家であり、この国の西洋音楽のために身を捧げた芸術家だが、修道女になった娘が来るぐらいで、花束を供える人もなく、まったく淋しいかぎりである」と嘆いていた。

彼はすでに日本の明治維新、二十年間も日本の海軍軍楽を指揮養成したあと、日本国歌「君が代」を作曲するなどの業績を残して本国に帰り、プロシア王室楽長という名譽をドイツ皇帝から受けている。

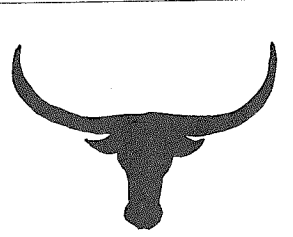
一八九六年閔泳煥がロシア皇帝戴冠式に参席して帰ってきて、軍楽隊創設を上奏したあと、高宗の政府はドイツのシレジア州法官の子息である伝統的なベネディクト派天主教徒であるエッケルトを招聘したのである。彼は二十年前に日本に西洋音楽を植えつけ、二十年后に韓国に西洋音楽を植えつけた。「私の父は一九〇一年初頭、本

国を出発して二月十九日ソウルに到着し、パコダ公園に音楽学校(軍楽隊練習所)を設立した。……音楽団を組織し、李太王誕辰式場ではじめて演奏に成功したが、そのとき父の作曲である韓国国歌とそ
 のほかの曲を演奏……と、彼の長女アマリ・マテルはこう書いている。また、彼の次女は現在大邱の修道院長を歴任した修女イムマク
 ラタとして生きている。「わが国を救い給え/半万年の歴史 ベタル(古朝鮮の呼び名)民族/永遠に栄え 無窮なるよう/聖地東方の 流れすみずみまで/わが国を守り給え」がまさに彼の作曲によるものである。国王の命によってこの国歌はある程度うたわれていたが、大衆化するには難かしい歌であった。国語学者李熙昇博士は「私が中央学校に通っていたとき、唱歌教師李尚俊先生からこの歌を習いみなうたいました。この歌が愛国心を呼び起すことはもちろんのこと、その他にも愛国歌はいくらでもありました」と語っている。

王朝最後の意識と失国時代の共同の絶望を、愛国歌にはけ口を見出そうとする、こういう音楽の自然発生的現象は、国を失った長い時代の海底に潜流していたのが、それが解放後の作詞者未詳の安益泰作曲「愛国歌」として統語され、それがまたこの国の歌の第一の意義を含んでいる。

学部唱歌の「学徒歌」

金仁湜作曲「学徒歌」



水牛楽団のページ

水牛楽団は、去年の十一月十二月以来しばらく休んでいたコンサートを四月から隔月ごとに「水牛ミュージックコンサート」と銘うって再開します。コンサートには毎回異色のゲストを迎え、従来の楽器のほかに、フルート、ピアノ、バンジョーなどいわゆる西洋楽器も使って、楽団員の持ちかえで演奏をこころみます。企画には多くの仲間の力をかりて、意気込みもあらたにしています。

今年には伽倻琴(朝鮮の琴)やレバノンのブズーク(ブソクともいう)などもとりいれ、音楽のスタイルにあれこれ頭をひねっています。生活の匂い、土の香りのする音楽を求めて、水牛の歩みのように底力のある活動を近づけたいとおもいます。

水牛楽団活動記録

一九八一年一月二日(金) 山谷越冬闘争映画と音楽の夕べ 山谷玉姫公園
夜の炊きだしのあと、越冬闘争中の公園のなか、枕木をならべてつくられたステージで演奏する。不屈の民、プリバ、管制塔の歌など。途中で演歌のとび入りもあった。

一月二十三日(金) 金大中氏らを殺すなノ杉並市民集会 高円寺会館 参加者二百十五名
金冠のイエス、プリバなど韓国民主化闘争でうたわれている歌、クナリオンダ、再会など。在日韓国人政治犯支援闘争のなかでうまれた歌を中心にアヒランもまじえて、李政美の伴奏をする。楽団の歌手福山敦夫は伽倻琴をひいたが、アンサンブルは悪い。

二月十三日(金) 崔哲教さんを支援する松戸市民の会結成二周年集会講演とコンサート 松戸勤労会館ホール 参加者百二十名
この日も李政美の伴奏。前回の反省から、伽倻琴のかわりにブズークを加える。プリバ、再会をみんなであうたう。

二月十八日(水) 金大中氏らに自由を新宿コンサート 四谷公会堂 参加者五十名
この日も李政美と共演。ブズークはこれで水牛楽団に定着したようだ。会場からその時その人をリクエストされる。

三月四日(水) 岩槻市立岩槻中学校 非公開 「絵とき唄ときバナナ食民地」

三月二十一日(土) くいともよう戦争への道 婦人民主クラブ結成三十五周年 東京 YWCA 一時半 反戦歌を中心に。

四月二十四日(金) 水牛ミュージックコンサート 第一回「ウルシヤワ物語」 中野文化センター 七時 前売一五〇〇円 当日一八〇〇円(四月発売)

ナチ占領下、ウルシヤワの辻音楽師たちの歌、ウルシヤワ労働歌、ポーランド労働者たちの愛唱歌、映画(灰とダイヤモンド)のなかであうたわれるパルチザンの歌。シヨパンのポロネーズ、マズルカなど。ゲスト 林光、水木陽子

韓国青年学生の発表した「歌謡ベスト10」

「朝鮮新報」'81・1・28

韓国を往き来している人の伝えるところによると、今、韓国の青年学生たちの間で、全斗煥、金鐘泌、李厚洛、崔圭夏など、権力争奪と不正腐敗、民衆殺りくに、血まなこになっていた政商たちを糾弾している「歌謡ベスト10」(人気のある流行歌10曲)というものが流行しているという。

現在あるいは過去に流行した韓国流行歌の曲目に状況が似ている政治家たちを結びつけて、ファッショ集団と政商たちを辛辣に断罪している。

昨年後半からうたわれ始めた「歌謡ベスト10」を見てみると、以下のようなものである。

第一位 全斗煥「オレは幸福だ」(나는 행복합니다)

この歌は現在もとても人気を集めている。

青年学生たちは、たび重なるクーデターと光州大虐殺で「大統領」の座をかすめ取った全斗煥に対して、憎悪と反感、嘲笑をこめてこ

の歌をうたい、全斗煥をこの歌の「歌手」に選んだ。

第二位 金鐘泌「幻想」(환상)

朴射殺事件後、一時は民主共和党の総裁として、「大統領」の座を夢想したが、5・17クーデターで全斗煥に不正腐敗の名目で逮捕、拘禁され、釈放後政治活動の一切禁止を命じられ、自宅軟禁状態にある。今後も「幻想」のみで生きつづけるのであろうか。

第三位 崔圭夏「あまりに短い」(너무 짧아요)

朴死後、何の実権も実力もなかったが、「幸運」に見舞われ「大統領」に祭りあげられたが、それもわずかに九カ月間で、昨年八月に全斗煥に追われた無能無力の「大統領」崔圭夏を皮肉った歌。

第四位 金載圭「後悔」(후회)

朴正熙の腹心でありながら釜山・馬山人民蜂起にショックを受け、

危機感から朴を射殺したが、彼の計画どおりに事態は進まず全斗煥によって逮捕、死刑に処された。

第五位 朴正熙「なぜ気がつかなかったのか」(왜 몰랐을까)

腹心として信じていたKCIA部長金載圭の陰謀に気づかず、射殺された朴の愚かさを揶揄した歌。

第六位 金泳三「追憶」(추억)

新民党党首。「三金氏」の一人で世論の注目を受けた。一時をなつかしむ金泳三(現在公職追放)の立場を比喻している。

第七位 金大中「木浦の涙」(목포의 눈물)

朴正熙だけでなく全斗煥からも抹殺の凶悪な弾圧を受けている、木浦出身の民主人士金大中の心情を代弁している。

第八位 李スンジャ(全斗煥夫人)「スンジャよ門をあける」(순야 문 열어라)

「スンジャ」という名前は韓国の飲み屋では接待婦の名前としてもつとも通俗的かつありふれた名前である。これと結びつけて全斗煥と妻の李スンジャを指弾している。

第九位 ホン・ボゴク(崔圭夏夫人)「ブスで、ごめんなさい」(부성 거서 죄송합니다)

歴代の傀儡大統領夫人のうちでは、崔圭夏夫人がもっともブスといわ

れている。

第十位 李厚洛「泣くためにオレは帰ってきたのか」(울려고 내 가 왔던가)

李厚洛(元KCIA部長)は朴射殺事件があった年の十二月に海外に出たが、これを「亡命」と指摘するうわさが広まった。翌年春に帰ってきた直後に逮捕、財産剥奪、公職追放処分を受けた。

青年学生たちは、李厚洛の帰国以後の立場を皮肉ってこの歌の歌手に李厚洛を指定した。

「歌謡ベスト10」は、全斗煥を始めとして、政商たちに対する憎悪と不信をするといふ嘲笑で表明している。

口があっても、思い通りにしゃべることができない軍事独裁体制下で生まれた民衆の知恵といえる。

上記の「歌謡ベスト10」の中の第八位と第九位以外は、韓国で現在あるいは過去に流行した歌である。

第三位の崔圭夏に対しては「私はまったくバカのように生きたもんだ」(나는 참 바보처럼 살았군요)という流行歌が大学ごとに学生たちの間で歌われている。

どうです? 「水牛通信」読者のみなさん、「歌謡ベスト10」

日本版をかんがえてみませんか? 胸にひびく調べとともに、登場する大物歌手の名は? 知恵をしばり、くふうをこらした

投稿をまっています。

(編集部)

模索舎十年

五味正彦

模索舎は昨年（一九八〇年）の十月に、設立十周年という一つのポイントを通り、その後も日々の営為を積み重ねて今日に至っている。

編集委員会から与えられたテーマは、——場としての模索舎、十年間を考える——ということだが、一口に十年といっても、当事者で、なおかつ十年間その場にまがりなりにも係わり続けてきた私にとって、そうであるが故に模索舎の全体像をとらえ返すというのは、なかなか困難な作業であり、期待にはそえないかもしれないと最初にお断りさせてもらう。模索舎は何をやっている所かと一言でいえば「書店」である。経営規模こそ、どの町にもある、古ぼけた忘れ去られかかっている小さな本屋以下だが、やっている私たちの志は大きい。たとえば、設立当時には、「人民資料情報センターの創立に向けて」という方

後が大部分。ベトナム反戦・反安保・全共闘運動の中で出会った仲間だった。

六九—七〇年闘争の高揚と後退の時期、キヤンパスから街頭からしめ出されて、私たちのグループだけでなく、多くの小集団が喫茶店などを転々としながら「これからどうやって闘っていくか、喫茶店か出版社か（そして模索舎設立以降だ）」模索舎みたいな本屋でもつくって、そこを拠点にシコシコやっきたいね」などという話題を一度ならず討論していたはずだ。がたいていは願望どまりで、たまたま私たちの集団が数少ない実現例となつた。

ともかくも私たちの集団においては願望が具体化したのは、ゆるやかな結合とはいえ、集団が大きかったこと。そしてほかのグループよりは、（運動）表現の自立と拡大について、あるいは表現拠点の建設についての位置づけというか、目的意識性がいくらかしつかりしていた（多くのメンバーが、ミニコミを作り、自主出版社を設立し、あるいは出版社に勤め出していたこともあって）などの理由をあげられるが、と同時に設立・運営するに足りる必要最小限のカネがたまたま集まった

向性で、〈情報センターへの模索舎〉と命名している。もつともこのような大それた形容語については「人民」にしても「情報」あるいは「センター」にしても、どうもその内容が今一つとらえきれないということもあって、内部討論の結果とりあえず現在は看板を外しているが、志としては模索舎だけの問題としてではなく模索していくつもりである。

志だけではなく具体的にやっていることも、普通の本屋とは相当ちがう。普通の本屋は商品を東販・日販というようにな取次店（本の間屋）から一括して仕入れる。模索舎の場合は、全て出版社・出版者との直接取引である。たとえば三三書房のような比較的大規模出版社の場合も、野草社（雑誌「八〇年代」等発行）のような小出版社も、そして、この「水牛通信」のようにそもそもいいわる書店という場にはほとんど置いていない

という要素も無視はできないだろう。

討論をしつつ、同時並行して店探しも開始した。場所は新宿、今でこそつまらない街だが、七〇年代前半くらいまでは、新宿でしかという独特の雰囲気があった。たまたま新宿御苑の近くに相場よりちよつと安そうな新築ビルの一階が見つかった。「何業も可」というかわりに、コンクリートむき出しのほら穴のような空間だった。——今でも天井などはその当時のまま残っている。——十二坪弱、家賃九万、保証金二七〇万円。

討論は一挙に具体化した。今度は金集めと青写真づくりである。安いメシも食べられる喫茶店のなもの、プラス、ミニコミのスペースを、という程度のイメージをどう具体化させるのかということ、内装・設備費も含めて五〇〇万円近いカネを集めなくては、ということだった。実際には十月二十八日の開店時点で四五〇万円程度集まってなんとかスタートできた。

この金額、その後のインフレを考えると現在では三倍くらいの感覚だが、私たちの周囲を見渡して、今模索舎をもう一度作れるかと考えると、九九・九%不可能だろう。たぶん七〇年の状況という時の勢いを抜きにして模

ミニコミ・自主出版物の場合も同じようにあつかわれてもらっている。

というより、より正確にいえば、普通の書店では置かれないミニコミ・自主出版物のために模索舎をつくつたのだ。

闘いは、あるいは運動は必然的にその内部から自分たちの表現をつくり出す。映画・演劇・音楽・新聞・雑誌・パンフレット・本・ポスター・ステッカー・チラシ……、そもそも、もっともとした運動の中からつくられる表現行為は、今あげたような既成の用語ではジャンル分けできないようなクロスしたものでしょう。そして表現内容も、方法も既成の秩序とは相容れず、はみ出し、ぶつかりあう。今エコロジ運動の中でとびかう用語を借りれば、オルターナティブ・ミニニケーション。十年前、一九七〇年当時、そのような人々と表現が出会いの場を求めてうごめいていた。

このようならごめきと流れの一つの集約点として模索舎設立があった。七〇年夏からの討論・準備そして設立に参加したメンバーは約五十名。おおまかな構成は、年令——ほぼ全員が二十歳プラスマイナス三歳くらい。階層——大学在学中または中退あるいは卒業直

索舎のことは語りきれないと思う。

当初のイメージはどう具体化されたのか。喫茶スペースにたまり場、討論、安い食事とコーヒー、映画上映、壁面展示等々と、ミニコミや本の展示販売をどう組み合わせるか、議論は百出したが、結局タバコの煙や料理の油污れで本が痛むという現実的意見が説得力を持ち、十二坪を壁で仕切って二つのスペースにすることとし、間に通路を設けて両者一体のイメージを残すことに落ちついた。

喫茶スペースは（スナックシコシコ）と名付け、七二年四月まで一年半維持したが、結局敗退、ミニコミ・自主出版物であふれた模索舎が、壁をとりはらって全体を占めることになった。なぜ喫茶の部が失敗し、一方本を売ることが現在まで続けられているのか、これは模索舎という場の運動を考える時、さけて通ることのできない総括のテーマであるが、紙数が足りないのでここでは省略する。

集団や場の維持を考える時、運営の方法（約束ごと）と実際の人間関係が一番重要なことだろう。私たちの集団は形式としては資本金三〇〇万円の「有限会社」をつくった。がこれは対税務署、対権力関係を考えての名目上

のこと、権力の直接の介入は現在まで「わいせつ文書」取締りという刑法一七五条の名もとの模索舎「四畳半」弾圧一つ——このひとつでも十分によけいではあるが——ですんでいるのは、他の様々な運動体や個人宅が、いかなる法の名においても不可能な過剰弾圧をされ続けているこの十年間の実態を見るにつけ、かつこうだけでも資本主義的飾りをしていっている効果はそれなりにあるのかもしれないと思う。

模索舎運営の実際は共同運営、今風に形容すれば自主管理で、もちろん出資金の額や、出資のあるなしには無関係にメンバー全体の会議を開いて方針を決定するということでスタートした。

その後の十年間に大きな筋目は二つあった。最初は、七二年夏の「四畳半」弾圧、この問題については機会あるごとにふれてきているのでここでは省略する。そして二番目が七七年秋に「模索舎閉店」と朝日・毎日新聞に誤報までされ、大きな反響を呼んだ「解体も辞さない、それまでの模索舎の総括作業」の提起だった。

これらの「事件」をメルクマールに、模索舎を支える集団の質もかわってくる。総括提

起のために出した「声明」ではこの問題を次のようにまとめた。

「模索舎設立当時の三十—五十名の集団は初期の段階では、決定・執行能力を持つ集団であり、専従の人材プールでもありました。実際に七三年までの専従はほとんど、この集団の中からやれるものが交代する形で維持されてきたのです。しかし七二年夏以降の模索舎の構造的確立（変質）と、その間に集団の構成員がほとんど職を持つたり家庭を持つたりで、可変的にチェンジすることが事実上不可能となり、その後は模索舎の利用者に声をかけたり、公募したりして専従の補充を行なっていたことになっています。」

このような認識にともない、七八年秋に設立当時のメンバーとその後の関係者に集まってもらい、久々ぶりの全体会議を開催、その会議をもって実体をなくした全体会議を解散、その後は、模索舎の専従（現在四名）が名実共に模索舎の主人公であり、他の人々は協力者であることを確認した。

しかしこのことは模索舎を支える集団が小さくなったことを意味してはいない。総括を

機に、模索舎は模索舎の実際の利用者——ニコミ・自主出版物をつくり持込む人、必要として買求める人、そしてそのための空間と機構としての模索舎を維持する専従の私たち——この三者の有機的結合を追求する中で今後の模索舎をつくっていくことをはっきりと打ち出した。

私たちが、総括の対象にしようとしたことは（ここではその内容をほとんど展開できなかったが）模索舎個々の問題もあるが、闘い（運動）と集団、闘い（運動）と表現ということを考える時、多くの人々と共通するテーマをはらんでいるはずだ。そういう意味でも簡単に総括終了、というわけにはいかず、現在も継続して追求している。

そして十周年を機に新たに二つの作業に着手した。一つは表現者・読者・模索舎の三結合を追求する「模索舎通信」の創刊（模索舎十年史の連載開始）と、この十年間に「模索舎」に納品された自主出版物総目録の編集・刊行である。この目録に掲載された自主出版物の絶えることなき納品なしには、十年間の模索舎はありえない今後もない。模索舎十年の最も具体的な歴史証言であると考えている。

境川私記

刈谷市南端の衣崎に、境川流域下水道終末処理場計画が発表されるや、この地の農民たちは、元刈谷反対同盟を結成、農地取り上げと公害激化を招くこの計画に、県当局と真正面からの闘いを構えたのです。そして今年で十一年目、当時の日本の工学の学者すら、流域下水道のもたらすものを知らなかつたし、農民たちも不安にかられ、お先真暗の状況のなかで、手探りの学習会が続けられたそうです。

六市三町の下水を集め、一日百万七トンの処理をする世界最大級の処理計画です。そこで一番の問題となったのは、トヨタ自動車とその関連企業の工場から出る、すべての汚物、産業廃棄物をここに集めて、一般の家庭から

堀田博之

出る糞尿をはじめ雑水とともに薄めて活性汚泥処理をして、衣浦湾に流し捨てるということです。数百の工場から出る重金属類が解けてなくなるわけはないし、未処理のままばらまかれ、魚や鳥や農作物にはいり、人体にも多大の害をおよぼすことは、水俣病をはじめとし、多くの公害病が教えてくれたところです。

この農地は干拓地で、長い間塩害に苦しんだ後、その一部に市の塵芥捨て場がつくられ、ネズミの被害による無収穫の年が続き、そして夏にはハエの大軍におそわれ、立ち歩きしながら昼の弁当を食べたものだと、渡辺かずみさんは昔語りとして話してくれました。「刈谷の百姓は背中がママ炊く」とまでいわれ

たとか。夜の明けやらぬうちに、かまどでめしを炊き、炊き上げるのも待ちきれず弁当箱に入れて背中に負い、大八車を引き町に出かけたり、野良仕事に出て一仕事をして朝飯を食ったそうです。そのような働き者の百姓たちの長い間の土作りで、豊かな農地を作りあげたときに降って湧いたのがこの計画です。それからの苦節十年、枕を高くして寝る夜もなかったという渡辺育穂委員長の顔のしわの奥で笑った目は光っていました。

昨年十月十二日農地取り上げのための、愛知県取用委員会の裁決が下り、強制取用にもなる諸々のことが起るのではないかという危機感のせまるなかで、団結小屋の建設が始まりました。材料はすべて古屋を壊した廃材です。完成後この小屋を訪ねるほとんどの人に「設計図は？」ときかれます。いや、何を設計図どころか、物指し一つ使いません。目八分ということがありますが、目でらみながらのニワカ大工。土台を伏せ、両妻の一抱えにあまる、二間半ぐらゐもある丸太を半町もの先から運び、建て起こして合掌を組み終えたときの参加者の顔色は、血の気も引き、小雨の中で地べたにへたばりつき、背であえ

勇をふるって屋外に出ると、地面は霧でおわれて白く光り、息の立ちのぼる小便のほけも、熱をとられるようでおいしいことをしたようにも思いこぶるいしますが、これだけはどうにもなりません。団結小屋を訪ねる人たちが「寒いでしょうね」とねぎらってくれるのですが「冬が寒いのは当然のこと、セントラル・ヒートイングのある団結マンションもないだろうし、ここは団結小屋ですよ」と皮肉を言うようになってしまいました。なんとヘソ曲りな。「石油ストーブをもちこもうか」とか「学習会をやるのによい場所だが、電気がないのが……」字を読んだり、メモをとらなくては学習もできないとも言おうとしたのだろうか。小屋での生活が続くと思わが変わってくるのか、電燈がなぜ必要なのかと頭をかき上げるようになりました。

便利と豊かさを善として求めた近代の物質文明の延長線上に、人殺しの公害があり、放射能を年中吹き出す原発があり、金属パットで親殺しをする少年を生む素地があることは言うまでもないことだと思ふのですが、字に書けば、こんな条書になってしまうだけに、もつと多くの人がこの小屋に来て、生活をともにするなから試行錯誤したいと日々感じ

るわけだ。

ここで一人で暮していると、一日に三合の米と水一升（一斗ではありません）味噌少々あれば十分です。貧しいからこそ豊かな世界を垣間見ることができるようになります。人類史のうちで、針の先で突いたほどの点でしかない近代文明が、どんなことで崩れていくのだろうか。ガタガタと音をたてている手前のところと、霞んで未だに見えない向岸のところを足で掛けかけているような気もするのです。

降って湧いたというよりも、工業化と巨大資本の収奪のなかで狙いうちされる農漁村、ここ境川流域下水道終末処理場も、その一環であることに疑いはない。もう一度自分のところに戻って、生活のありようと生き方を、この小屋を通して考えてみたいものです。

告

当域は境川壕土守護大神の霊地なり 為めに百姓は子々孫々に至る迄豊稔に努むるは当然の任なり

天聲 人殺シ下水処理場は断じて造つてはならぬ

地聲 農地は百姓の命なり 弾固強制収用

ターミナルに〈民衆のひろば〉を

大阪駅前に労働者パブをつくる会

神村隆志

「小林旭」のこと
野っぱらパブがはじまって、それは一年余がすぎた春も終わりの頃だった。やりはじめた頃には、鉄骨が半分ぐらいいった大阪駅前第3ビルは、その頃にはもうすっかりできあがって、西日本一高いというこのビルは、どのビルよりも軽薄な白さでそびえたち、私たちを威圧した。つい先頃まで、陸橋の降り口は北側だったのに、その日は何と西側につけ変えられ、したがって私たちの（待ち合わせ場所）となる「野っぱらパブ」のひろばは、その降り口の、道路とも、工事用の資材置場ともつかぬ約十メートルほどの空間だった。いつものように、缶ビールで乾杯し、歌が口

びるをついで、即興芝居が人の往き来する空間ではじまった。勤サ協のホリゾントスチヤラカ劇場のおんなたちが口ひげをたくわえて「春の防犯運動」と銘うって、当世流行の大は「危機管理」から小は「市民防衛」にいたるまでの状況風景を、言葉よりは身のこなしの中にイメージして、演じるというよりは跳ねまわってあらわした。道行く人々は、一瞬間くらい、視線を流して通りすぎていく。この情景も毎回ほとんど変わらない。そのときだった。それをニコニコとみていたジャンパー、地下タビ姿のオッチャンが、私たちの参加の通行手形である一缶二百円のビールを注文し、やや一呼吸あつてから演歌『女のみち』をうたうというより、うなりあげ

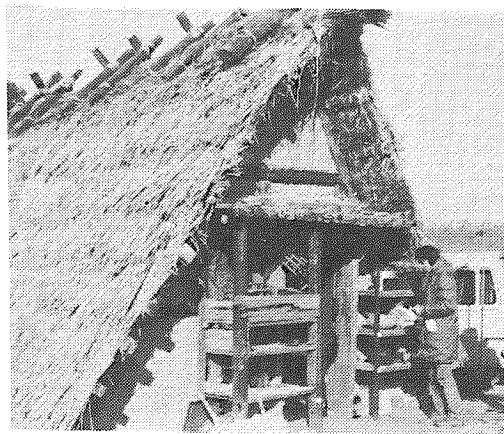
を阻止する

人聲 百姓の土地に権力は一步も立入つてはならぬ

右記を犯したる者は死罪を申し付けるものなり

境川壕土守護大神

これは今、団結小屋の近くに建つ高札の一つです。べしみの鬼神よ、この地に力を貸したまえ。



はじめた。

それぞれが自己紹介し、「大阪駅前に労働者パブをつくる会」のいわれの話をする、このオッチャンは「わいの名は小林旭や」と自己を語りはじめた。それは、一口でいって、地方から出て八年、今は釜ヶ崎に住みついて、今までいろんな飯場をまわり、大阪駅周辺でもいくつかのビルの建設現場でトビとして働いた。しかし、ビルができるまで、自分で、自分がつくったビルでさえ入れようがない。「第一、こんな地下タビでは入れてはくれんわのう」と大地をけて笑った。そして、その瞬間、彼は踊りだしたのである。すかさず、スチヤラカ劇場のおんなたちもあいの手を入れて踊りだすと、彼は両手をひろげ、足をふんばり、片足をあげ、クルツときびすをかえすとみるや、何と大地に両手をつけてトンボ返りの一回宙返り、さらに身体を弓なりのようにそらせ、タンパリンのリズムにのって縦横無尽に駆け、はね、跳びまわった。その軽やかさのなかには、飯場と高層ビル現場でトビとして働いた労働の身ぶりが、私たちの（想像力）の身ぶりを越えて、コンクリートの大地にしっかりと刻印されていた。かくして私たちは「労働者パブ」の連帯すべ

き実在の日本の第三世界、下層プロレタリアートそのものとはじめて路上文化表現の（ひろば）で、労働の身ぶりの即興的な文化の共同化をみのらせた。

第三世界と底辺労働力をすすって

私たちが都市の中で大地を失って久しい。街から土というものが消えたとき、セミヤチヨウ、トンボもまた消えた。今の子どもたちは無機質な怪獣やドラエモンを生物の代用品として生きている。電池やゼンマイで動く、血の流れぬ生命はかなしい。

道や街も本来、生きものである。それは民衆の生活の必要から長い年月をかけて生まれた。しかし、今では、国家独占資本主義の都市再開発が、生活者のいる居住人口を破壊してやたらと鉄コンクリートのモニュメントをつくりたがる。大資本が街角にあつた八百屋や魚屋、豆腐屋を根こそぎなぎ倒して、スーパーやコインの店をどんどんつくる。

そうしたものの象徴が大都市のターミナルである。そこにはノッポビルが林立している。それは五木寛之ならずとも、パリのエトワールからコンコルドの方向をながめたとき、「この豪華を支えた富は、どこから来たのか」（「新

宿西口の酒場で」と、思わずヨーロッパ文明とコロンの関係を直截的に考えてしまうように、日本のそれもまた、世界に冠たる日本帝國主義のエコノミック・アニマルが第三世界の抑圧と収奪の血肉のしたたりをつみあげてそそりたつてゐる。

皇居が（人民ひろば）とよばれたり、新宿西口が（フォークひろば）となつたのは今や



昔である。大都市ターミナルの現実には、たとえば大阪駅前、今まで当然であつたピラ撤きという、最低の表現の自由さえ、機動隊を動員して規制するというふうな、急速に八〇年代型「危機管理」への傾斜をつよめている。だが、大都市のターミナルは、幾十、幾百万の人々が押しひしめきあつて、すでにそれは民衆の生活の一部分であり、そこに視点をすえるなら、ターミナルは本来、（民衆のひろば）ではないのか。このターミナルのもつ本源的な公共性は、いかなる私的独占といえども占有することは不当であるという、現代の「天賦人權論」はなりたたないのだろうか。いや、この大都市の「豪華な富はどこからきたのか」という問いにもどれば、それは第三世界とともに、地方の龐大な労働力をすすって集積されたものでもある。

それは、わが「小林旭」氏が証明したように、ビルをつくつた創り手はその空間の中にも入れず、十万人の無縁仏が眠る釜ヶ崎にもなく生きている。

そして大都市のターミナル——わが大阪駅こそは——沖繩、奄美、九州、四国、山陰、山陽、若狭から押しだされてきた流動労働力が、その後、日本資本主義の二重構造の底辺

にくみこまれ、過酷な搾取と犠牲をしいられる人々として駅におりたち、また、いろんな挫折と失意のうちに帰っていくところだ。中野重治の「雨の降る品川駅」の情景は今も形を変えてたえることなくよみがえる。

しかも、長びく不況は、新たな都市問題を生み、底辺労働者の極北は、「自殺」や「行路病死」にまでおいやられ、使い捨てにあつた過剰労働力は（ふるさと運動）で帰るあてない出身地にUターンを迫られている。地方出身者がはじめてこの目のくらむ大都市に降りたつてものごとをたずねるにも、労働条件が不当なもので抗議したくても、若いおんなたちが第三次産業・セックス産業の人格丸ごとしやぶりつくされる局面にあつても、かけこみ、相談できるところは、あの赤いランプの警察署しかないのだ。それではまるつきり、白粉をぬりたくつた狼の話ではないか。

散文調で多目的な横連合運動を

かくして、私たちは、この都市に巻きおこりつつある黒いつむじ風をみとどけながらも、それに対抗する春のそよ風のような民衆空間を、散文風に、ユーモアっぽく対置することが八〇年代には必要だと考えた。権力が恐ろ

しく非人間的でこわばればこわばるほど、民衆のひろばはやさしく人間的に語りかければよいのだ。あのロッキーフラットで出会つた「非暴力直接行動」の少女のように——。

しかも、大都市ターミナルにおける（民衆ひろば）の形成は、いろんな異議申し立てを横連合し、一つの運動の中に多義的な目標や要求を含ませておこなう、つまり、それは、民衆の価値観に立つかぎり、星の数ほどそれぞれの想いが輝やいたらよいのだ。

そして、問題をわかりやすくするために、大阪駅前に大阪市が市街地開発第3ビルとして建設中の西日本一高いノッポビルに狙いを打つて、「大都市のまん中に野っぱらを」と打つてた。

私たちはまず、（パブ）のイメージをふくらませる討論をおこなつた。それは、六〇七〇年代の行政闘争が、モノ中心の施設要求に力点がおかれすぎ、文化的（質）と民衆文化の共同創造の方法論を欠き、その結果、青年会館や文化センターは、氏名の登録制や運営チェックをうけ、モノとりと「危機管理」を下支えした反省から、運営の自治と自主権を根太いものにするためだった。そして、立派なものゝをめぐらず、小さな空間をどこの夕

ターミナルにもつくりだすその第一歩として大阪駅前を確認した。そのために、イタリアのチルコロやイギリスのパブからもイメージを盗んだ。

ターミナルは、中流意識の上昇志向が資本の手によつて（夢）（しあわせ）としてふりまかれ、金と欲望とが取引される典型的な市民社会のショーウィンドウでもある。それはあの時代閉塞の時代の啄木ならずとも「的もなく、ほつつき廻つて疲れた足が、遺場の無い心を運んで」（「硝子窓」）毎夜毎夜イルージョンに一人ひとりが獣的な心をもてあそばれるところだ。

それに対して私たちは、ターミナルが、もつと下町風な、縄のれんをくぐる居酒屋や立飲み風に、つまり労働者の労働のあとの自由なコミュニケーションの場として確認され、孤絶的な市民社会に対抗する横つながりの労働者社会、民衆社会の価値観で、現代の都市再開発に反対していかなければ、富は富をよび、生活らしさは限りなく遠ざけられていくだろう。

私たちは、七八年六月からそうした討論を準備会をつみあげて、関東大震災の日にあたる九月一日を選んで「大阪駅前に労働者パブ

をつくる会」を発足させた。

大道芸風の路上文化表現の対抗陣地

すでに述べたように、この運動は、多義的なものであった。行政闘争であり、対抗カルチュア運動であり、都市再開発への異議申し立てであり、「障害」者解放運動であり、自治と協同をかける運動であり、社会闘争であり、何よりも陣地形成としての対抗社会形成論としてそれらが横つながりであり、一まとまりであった。

しかし、私たちがそれを「労働者パブ」としてつぎだしている以上、理念ではなく実際につくりだしてみることが大切だった。むしろ、閉じられた室内のパブを最大目標にするのではなく、逆に、その要求と異議申し立ての方法をもって、大地とひろばを失ったターミナルに一時的にせよ、民衆的文化の空間をつくりだし、持続させることが大切であった。かくして、二年前の春、野つばらパブ・オープン・パーティは、建設途上の第3ビル前の道路空間に、車イスの仲間を含めて一群の陣をなし、缶ビールを片手に即興芝居やシングアウト、詩がたりにはじまる大道芸風の路上文化表現のやさしい空間をつくりだした。

人がセカセカとあわただしく流れるだけの路上のコンクリートに缶ビール片手に座りこむことになれるまでには一人ひとりの感性の内面衝突があった。そして人にながめられながらながめてきた街と人に対して価値転倒がたしかな足どりではじまった。ターミナルに山積みされている浪費的な商品文化に、その路上文化表現の存在自身が商品価値をもたない、一人ひとりの日常的な言葉・歌・身ぶりとして群をなして対抗した。流れていくものがそこではふみとどまり、私たちのかけがえない文化的想像力の「力」が交差されるようになってきた。

ところで野つばらパブの文化空間は、けっして集会ではなく、ターミナルのある空間を「待ち合せ場所」にしておこなう任意の、自発的なものである。ターミナルの寄り、群れをなし、あるいは千鳥足で歌をくちさむそうした特性を、私たちも寄り・歌い・踊り・散る一つの自然態の呼吸法としてきた。

しかし、八〇年をふりかえるとき、権力のこわばりに対し、民衆のやわらかい日常の身ぶりをしなやかにつぎだしたとはいえない。というより「自由光州」にふれてパリパリにこちらがこわばってしまった。

私たちは、韓国のファシスト軍隊が光州弾圧にむかうさなかに、紙芝居で金芝河の『五賊』を、九月の金大中氏第一審判決には富山妙子の『倒れた者への祈祷』の絵をみんなの胸にしながら立ち、うたった。十二月のバイバイパブはいづ金大中氏への最終判決がでるかに緊張しながら、手づくりの鬼の面をつけて『鎮悪鬼』を朗読、この年あらわれた多くの鬼たちを記念した。

八一年は、この非商品的文化空間として定着した路上文化表現にTORAさんのオリジナル『満員電車』のような、私たち自身がつきあっている日常をもっとユーモアとして批判を深めていきたいし、それには討論がいろいろある。

銀行と大独占の「夜警都市」に

もう一つのおどろきは、ターミナルが日に日に変貌を上げていくことである。この二年で、多くの人格をもっていた小売店、たとえば、古い黒い木の格子のあったおソバ屋さんも、狭っぽい店だったけれど、安くてコッテリとした料理の中華屋さんも冷たいコンクリートに変わった。

私たちの「大阪駅周辺ブラブラ実態調査」

でわかったことは、市の開発ビルは軒並み、大銀行と大企業に確実に占有され、生活と密着した居住区商店街が立ちのきを迫られていることだった。街の中からお風呂屋、ホルモン屋、軍手や長靴を売る店は完全に立ちふさがりに会っていた。現代の「都市再開発法」は、地主と家主に権利をみとめ、借家人の居住権と借家人の営業権はほとんどみとめられ

ず、それも地主や家主に従属したものである。その結果、大都市開発は必ず生活者たる圧倒的な借家人を追いだし、そこに住むことのない富める人々によって占拠される。その結果夜とともビル街は「夜警国家」の死んだ街になる。

大阪駅前で変貌をとげるのは何も第3ビル前だけではない。何とこの周辺一帯が八〇年代全体を通じて全くの様変わりをとげる計画が次から次へと進行中なのだ。

阪急の大改装を突破口としてはじまったターミナル大再開発は、大阪市の第4ビル着工が進んでおり、大阪駅自身が八三年には全国一の大阪駅前ビルとして完成する。しかもそれは、駅機能とは何の関係もなく、逆に駅機能そのものは縮少し、逆に、大阪駅のスペースを大資本に開放させるものだ。すでに駅の北側は大改装され、八〇年代後半は、駅北側の貨物を中心とした国鉄用地約三五万平方メートルが独占資本の分割対象となっている。関経連名誉会長の芦原義重が大坂ターミナルビル会長と大阪駅ターミナル懇談会の座長の両方をしめている。大阪市の大阪駅周辺の再開発について諮問するのがこの懇談会であるというのだから答はみえみえだ。

阪急ナビアは完成し、ダイアモンド地下街も、片町線と福知山線の連結も進行中だ。かくして、ターミナルから駅まで、ショッピングのために従来よりも長く歩かされ、「障害」者や老人をはじきとばす大エスカレーターや大階段、それも店以外に止まることのできないターミナルのコンベアが次から次へと新設される。

ターミナルはだれのものか——。この根源的な問いを投げかけるところから、日常における私たちが、いかに日本帝国主義の敷きつめたベルトコンベアの部分としてあつかわれ生きていくかがみえてくるだろう。ターミナルに公共の、民衆のひろばを現代の歌だ。そのことを、あまりつっぱらずに、じっくりと問題にしてゆけたらとおもう。そのためにも、まず典型的な商品文化空間に、シンブルな非商品的集団文化空間の対抗がだれでも、どこでもできる方法だ。

へ太鼓たたいてーひとときまよせてよなと、現代の「八丈太鼓ばやし」のバチをひびかせ、管理されたターミナルの大地に水をみんなでまきませんか。



貧民窟でなんだんねん

貧民窟共同体住人

事のいきさつは六年前である。

大阪というところは、高尚な文化とはいささか距離を隔てる都会である。皮肉にも明治の勸業博覧会、戦後の万国博覧会がこの大阪の地で開かれた。時の権力でさえも「文化不毛の地」とおちよくって差別的博覧会をここに据えた。大阪で「文化」といえば文化住宅（木造二階建てアパートといったもの）を意味するぐらいで、食うて寝てチョンの庶民の生活に高尚な文化の入る余地などない。それ自身、まぎれもない「文化」なのだ、いわゆる「文化人」などというものに対し社会的な存在価値を全くもっていないというのが感情である。そんな不毛の地に「文化を考える会」というサークルがうまれた。

「文化を考える会」は七〇年代の混沌とし

スツクモンダ騒動の絶え間もなく、共同生活はマイホーム的ニューファミリアよりたこ部屋の方がびったりきて、四人は「貧民窟」に、生活しないことで生活しようという革命であり、また、道楽であるというシンド楽しさを引き受けていった。その間、フリーセックス集団なんか？とか、意識的共同の確立を、とか、「文化を考える会」の論議は混沌のなかにも賑わったものの、「貧民窟」がサークルの到達点となることで四年間続いた会が淘汰されていったのでした。

そのうち、ひとりが恋愛に走り去る余裕もでき、またちようどマンションの出物が見つかり、二年前の四月、三人は別天地を求めて引越した。大阪市準工業指定地域、小児喘息培養区、ポルトナットの町工場に札束とびかう「人類は一家」競艇が隣接する生産と消費の町へ。15帖のワンフロアというスペースに盛りだくさんの希望をもって七百万円の借金をし、三人はなげ無しの金をはいた。ローン返済、名義の件では誰と誰とが婚姻関係を結ぶと有利かなど話し合ったものの、逆手にとったつもりの内実が負けそうな気がしてやめた。

盛りだくさんのプランというのは、スライ

た玉虫色の状況を反映して、さまざまな文化を考えるサークルであった。月一度の例会を場を点々としながら、武井昭夫『戦後文学とアヴァンギャルド』、吉本隆明『共同幻想論』、雑多の演劇、コンサート、映画などを合評した。そのうち記録を同人誌にしようとなり、南大阪の堀本さんと宮下さんが暮らす長屋の一角に拠点を置くことになった。つつまじやかな二人の生活空間が、印刷場、会議室、合宿所へと変貌していった。一年もするうちにいろんな職業的文化人まで出入りするようになって、傾いた家屋がより一層歪んだ。人の出入りが頻繁になったことで近隣者たちも困惑していた。薄い壁のこちらでは、生活語と程遠い会話、時には激しい口論、耳慣れぬ音楽、徹夜で話しこむことも半日常态化していた

ドや8ミリの映画会場、ミニコンサートのやれるライブスポット、それに小さな芝居小屋、会合所や合宿所、芝居や歌の練習所など幅広い利用を、ということだった。が、いざではじめに歌の練習をやった途端、下の住人から猛烈な抗議が、どうも振動が伝わるらしい。施工主が工事費をケチって床が薄いようだ。平身低頭で謝りながら、それでも芝居の練習は和室の畳をひきはがしてその上に布団を敷いたり、ピアノには弱音装置をつけたりしてあげなかった。しかし、夫婦二人暮らしの階下の自称「精神労働者」は会議に寄った十数人や連れてきた子どもの足音にも過敏だった。売り言葉と違う、と西武住宅に問うても全然埒があかず、今では殺されないうちに床に防震材を張ろうかと、財政と手間を検討中だ。

このような近隣市民とのいざこざをぬうように、この場所にはさまざまな人がやって来る。主には大阪の人たちだが、各地方の活動家、時には有名人名、稀には外国人も立ち寄る。遅くまで話にふけり酒を飲み賑やかだ。ひと頃は、その賑やかさと生活（睡眠や創作と明朝の出勤）の亀裂に個々悩んだりもしたが、今では整理しながらほぐれてきている。先だ

から。ある日、帰ってみると表札に紙がはさんでいる。「この世のものとも思えぬ音楽と騒音、いこいの場をくずす、怒る」と書きなぐってあった。いつの間にか半居候も常態化して、家主から契約違反ととなりこまれたりした。

同人誌「ブナルア」は発行を重ねていた。「ブナルア」とはブナルア群婚からとったもので、人類の広場のあけぼのを意味していた。谷川雁らの「サークル村」から集団的主体性を誘導され、「共同」をイメージしあう中から共同生活への意欲はフツフツと湧いた。イメージしあうといっても各々の思いこみは山岸会から連合赤軍まで多岐をきわめ、ただ「共同」っていうんやから共同便所と共同炊事場だけにはありつけるやろ」という一線の光に望みを託して、三年前の五月、共同生活を開始したのでした。

ある者は家出同然で「貧民窟」に加わり、ある者は心配で居たまれない母親を伴ってその門を叩き、先住者のひとりには男女一対の限界をこえようと、残るひとりには出たとこ勝負のつもりで、みんなは半分くらい清水さんの舞台からでも飛びおりの気持ちでした。「貧民窟」のお家の事情がそんなだから当初より

つてはフィリピン農家活動家も来た。彼は置いてあつたギターを取り、「とてもいい楽器ですわ」と言いながら歌をうたつた。それはアメリカフォークのようなものだった。金野さんはタイの「生きるための歌」をうたい「この歌を知っていますか」と聞いたが、彼は知らなかった。それは無理からぬことではあつたが……このようにさまざまな人との出会いは楽しいことである。ちなみに、このこの宿泊代は三百円だ。

いま、メンバーは新聞社勤めの金野さん、家電会社で働く堀本くん、共同保育所で保母をする宮下さん、この六月に誕生した新入りの麻耶さんである。ひとりの共同生活費は三年間で、一万五千円から四万円、四万円から五万五千円にはねあがつた。食費、保育料、ローン返済がその主な支出である。作業量の分担は毎日刻みだ。保育所の送迎、麻耶さんの手助け、調理、そうじ、洗濯などの十数項目〇〇さん担当が生活表を埋める。それもこれも、取り決めは不定期に行う「共育」に依る。「共育」というのは、竹内成明の言を借りて、「ともに育ちあおうとする終わりなき関係」である。柳下村塾や光州コミュニティ、中井正一の共同生活のことなど、「文化を考

える会、メンバーも時たま入ったりして学んだ。集団的規律というものがあるとすれば、皮膚感覚も思想も言いたいことはこの「共育」

で、である。そしてそれぞれは一对一对一対一であって対関係は存在しない。対意識で一年足らずここで暮らした男が、「お前はきつい女だ」と罵って出た時、皆は哀しい思いをした。また、なるだけゴチャ混ぜの年齢構成がいいと思っている。「子どもでも入ってくれば共同生活の理念なんか霧散するぞ」の挑発にはどうにかこうにかもちこたえている。

このスペースに越して来て二年、共同生活三年たった春、その決算は、

わたしたちの「文化」活動は、子どもたちを育てながら創造していくことに価値をみるわたしたちの「文化」活動は、時間がなければやれないという貧しい主体性を克服する（実のところ「克服してみたい」）

わたしたちの「貧民窟」は、「文化」に縁のない大阪の庶民の挑発者であり道楽者である変人たちの交流の場である

いわば、「貧民窟」は、変人たちの文化運動としての女子ども路線をめざす拠点なのである

編集後記

映画「水俣の凶・物語」の一場面。脳卒中で車椅子にすわったきり、目をとじている患者を、画家が写生している。ほとんどうごかない老人の顔にきざまれた年輪にくらべて、絵は明治以来の日本人が自分を見るとき姿でしかない。できあがった絵をおくられ、老人はことばにならない声をあげてよろこぶ。

近代芸術の自己偽瞞と、それが権威として通用する状況に、胸がつめたくなる。あまつたるいサロンの音楽、発見のない詩。作者たちの名だけが、ひとり立ちしている。水俣の死者たちは生きているが、水俣をえがこうとした文章も絵も音楽も、後光につつまれて、とくに死んでいる。共感を強要するこの技術は、題材によりかかって、批判をゆるさない。

生命の根源とか、目にみえない魂とか、べらべらと語られるほどに、目にみえるものさえ、影がうすくなつてゆく。こうした衰弱をかくした運動は、いつまで強行できるだろうか。

高銀の「流れ去った悲哀——過ぎし時代の歌謡」は、長期連載します。「うそで固めたことばはあっても、歌は真実だけをかたる」

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替（口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第三巻第三号

一九八一年三月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三（四二五）九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ